現代日本のテレビ文化論

－戦後のマスメディアの考察から未来型コンテンツの可能性を探る－

細川　貴広

【修士論文概要書】

3.11 以降、テレビ報道に関しての様々な有識者や市民の声は「テレビの終焉」を論じる傾向がますます顕著になってきている。しかし、アメリカではディスカバリーチャンネルのような、新しいテレビ産業の成功例もあり、一概に終焉を論じるのではなく、他のメディアやソーシャルメディアとの住み分けを検討すべきではないのだろうか？

社会問題になった、捏造問題や震災報道などから見えてくる、テレビの役割を再考するために、テレビ放送開始からの 58 年間に生まれた「テレビ文化」を分析する。その分析から見えてくる、私たちクリエイターが作るべきコンテンツと、そこから導き出されるメディアの重要性とは、一体どのようなものであるべきなのか、院生として関わってきたプロジェクトを土台にしながらまとめていく。

第１章：序章

研究を始めるにあたっての自身の背景や、まわりの環境についての自身の考え。テレビの黎明期より関わられている、テレビ業界人との３回の講義を元に、戦後テレビ史において重要なターニングポイントはどこであるかを明確にしていく。現在、進行中の２つのプロジェクトの発展を見据え、最終結論を導き出す。

第２章：戦後から成長期にかけてのテレビ文化の歴史と考察

開局以降の創成期は、様々な実験が行われた。ラジオとテレビの立場が逆転し、新聞をも飲み込みテレビはマスメディアとして大きく発展する。戦後最大の台風災害をきかっけに、災害報道のあり方の検討が始まった。昭和 28 年、NHK と日本テレビの開局より幕を開けた日本のテレビ史には、日本人の生活を大きく変えた様々なターニングポイントが存在する。スポーツ中継によりスター選手が誕生し、海外番組が次々と放映され、諸所の文化が融合促進され、これまで文字や音声でのみ伝えることしか出来なかった重大事件や大規模災害などが、映像によって報道されることにより、ついにはマスメディアの代表格となった。しかし、この裏には、テレビが抱える産業構造、スポンサーと広告代理店の視聴率目当ての番組制作により、コンテンツがドンドンと弱体化し、今なおその状態が改善さ

れずに今日に至っている現状もある。テレビが進まざるを得なかった、コンテンツの大衆化を、「娯楽性」と「社会性」の両面から横断的に俯瞰する。

第３章： 行政と市民との繋がりを創出するネット放送局「三田お宝探検隊プロジェクト」

インターネット上の映像を共有する文化を育てた YouTube　次に求められるのは「情報」の共有化。行政の協力のもと、地域の情報を映像化するプロジェクト「三田お宝探検隊」に求められる次なる展開。行政と市民との新たな繋がりの場として「三田お宝探検隊」プロジェクトが発足。学生目線の番組作りによって、市内の様々なお宝を明示し、作ったら終わりという仕事的な番組では表現しきれない「つながり」や、番組制作終了後の新たな展開などを見出すことができた。

第４章： 防災マルチプル電子図鑑から、新しいプラットフォームを

防災教育の重要性が問われる今日、iPad などのマルチタッチデバイスを駆使した、防災教育ツールを開発している。その背景と開発段階のアプリの概要を記す